
アースクロニクル・オフライン

ししだ じょうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイスクロニクル・オフライン

【Nコード】

N1995BA

【作者名】

ししだ じょうた

【あらすじ】

アイスクロニクル・オンラインは家庭用ゲーム『アイスクロニクル』のオンライン版である。人気タイトルのオンライン版と言うこともあり人気は実装から3年近くが過ぎた現在もそれなりのものがある。少女、神崎梅子は3年間ゲームを続けているヘビーユーザーの1人であり、最後にして最難関のストーリーークエストをたった1人でクリアしようとしている猛者である。最後のクエストをクリアした彼女が目にする世界とは……

1 (前書き)

性懲りもなく新作

3人称の練習を兼ねています。

お見苦しい点など多々あるかと思いますが適当に流し読んでやってください。

学校、それは中高生にとってはなかなか面倒な場所ではないだろうか。

中学校は義務教育であり、誰もが通う必要がある場所だ。義務である以上は仕方ない。

では、高等学校という場所はどうかだろうか。

義務教育でないとは言え、最終学歴が中学校卒業の人間はどのような職に就くことが出来るのか。選択肢は多いが、少ない。

必ずしもそうなるわけではないが、多くの場合はフリーターか肉体労働、ガテン系と呼ばれる職業に就くことになるだろう。

それが悪いことではないし、仮にそれらの仕事の就労者がすべていなくなってしまうえば世界の形は変わってしまうだろう。少なくとも、まっとうなそれらの職業に就く人間は絶対に必要だ。

しかしながら、全ての中学校卒業者がそれらの仕事に就いてしまっても問題になる。

ガテン系の仕事以外に就くには、絶対に必要というわけではないが多くの場合には高等学校の卒業や大学の卒業といったステータスが必要になってくる。

絶対に必要というわけではないとはいえ、そのステータスなしに就けない職業は多く、そのステータスがない人間が採用される可能性は、それが人間に比べて格段に落ちるだろう。

昨今の就学状況をかんがみるに、義務ではなく個人の自由とは言っても、半ば高等学校と大学を卒業するのが普通のことになっている。

前置きが長くなってしまったが、つまり何が言いたいのかと言えば、高校の授業というものはつまらないし、高校に行くのもなにか

と面倒だということが言いたいのだ。

というのが、神崎梅子の考えである。

花の女子高生が授業中に窓の外を眺めながらそんなことを考えているのはいささか問題であろうが、当の本人は教師が覗んでくるのを気にも留めない。

仲のいい友達と休み時間や放課後に雑談をするのは楽しいし、学園祭や体育祭などのイベントはそれなりに楽しむことはできる。

だが、学校生活の大部分を占める授業と言う時間が梅子には苦痛でならなかったからこそその逃避がこれだ。

梅子は授業が全く理解できないような劣等生というわけではない。だからといって授業など受けなくとも授業で行うような内容は、あらかじめ理解できているという話にはならない。

単純に、席について担当教員の呪文のような話を聞く時間が無駄な気がしてならないのだ。

社会に出る際に必要になるだろうからと高校に通い、授業を受けていると言うのに社会に出てからも使うであろうことなどほとんど教わった覚えがない。

たとえば数学だが、計算がしたければ電卓もあればパソコンだってある。

そもそも数字を扱う学問のはずだと言うのにlimやらsinやら英語が使われている理由がわからない。

その他の教科にしても似たような内容であるだけに、梅子にはこれらの必要性が理解できず、学校での授業と言う時間がどうしても好きになれない。

授業を受けるよりも友達と話をしている方がおもしろいし、有意義な時間だ。他にも音楽を聞いたり、漫画を読んだりするのもいい。そして、梅子にとって授業を受けるのと比べてなによりもまずやりたいことはオンラインゲーム『アースクロニクル・オンライン』だ。

このゲームは世界中の人間が虜になっている。などと大風呂敷を

広げられるほどに大層なものでもないが、日本国内ではそれなりにぎわっているゲームだ。

登録者数はおよそ200万人、実際にプレイをしている人間はおよそその半分と言われている。小さくはないが決して大きいゲームではない。

オンラインゲームというものの常であるとおり、のめりこむものはとことんのめり込んでいる。

アースクロニクルはもともと地球の創生からの歴史に主題を置いたストーリーの家庭用ゲームだ。そしてアースクロニクル・オンラインは文字通りアースクロニクルをオンライン化したもので、物語のバックボーンはそちらにある。

梅子も家庭用ゲームからこのゲームをプレイしている口の1人で、家庭用もオンラインもかなりのヘビーユーザーに含まれるだろう1人でもある。

当然のことながら上には上がいるが、花の女子高生でありながら1週間の平均プレイ時間55時間というのは普通以下ということはないだろう。

実際ちょうど中学生の時にオープンテストに参加したところから現在までほぼ毎日ログインしている梅子は古参のベテランプレイヤーでもある。

当然のことながらレベルはすでにカウントストップしているし、能力やアイテムも最高レベルのものが揃っている。

そして、あと1つだけ。最後の1つのクエストをクリアすればすべてのストーリークエストがクリアできる。

家庭用のアースクロニクルの外伝に当たるストーリーに沿って進められるストーリークエストは、それだけをクリアする目的でオンライン版を始めるのは無謀と言われるほどに長く難しい。

200万人の半数は途中で挫折し、インターネット上で速いうちにクリアした人間が公開した話を見て満足したらしい。

しかし、梅子はそれを見なかった。それが公開されたところにはア

ースクロニクル・オンラインの世界にのめりこみ、ストーリークエストもある程度のところまで進んでいたからだ。

ここまで来たからには自分の力ですべてを見たい。そう考えるのは梅子だけではないらしく、プレイを続けている人間は多くいる。

そして、ついに梅子もストーリークエストを全制覇する直前まで来ているのだ。こんなところで授業なんて受けているくらいなら、家に帰ってパソコンの前に座りたい。

梅子が切にそう願ってしまうのも仕方のないことだろう。なにせあと少しで全制覇というところで追加ストーリーが実装されたのは1度や2度ではない。そしてついにースクロニクル・オンラインを始めてから3年が経ち最終ストーリーの実装がなされた。

これは3年分の努力の結晶なのだ。

3年もの歳月をかけてようやくクリアできるとなれば、我慢できなくなっても仕方がないだろうが、後ろ髪をひかれる思いでわざわざ学校に来たと言うのに梅子はなんとか学校へと来た。

だと言うのに、授業は退屈。これではせっかくの自制心が浮かばれないというものだ。

時折窓の外に向けていた視線を黒板の上に掲げられた時計に向けては長針の動きの遅さにやきもきし、テキストに黒板に書かれた内容をノートに写す。教師の話など右から左だ。

そんな作業を5時限目まで繰り返し、ようやく放課後が訪れる。

1秒でも早く家に帰りたい梅子には、最後の5分間などは秒針の動きすら止まっているのではないかと思うほどに時間が遅く感じられた。

だが、そんな我慢もこれまでだ。帰りのショートホームルームが終わると同時にカバンをひつつかみ、一目散にドアへと走り出す。「うめつちい、今日カラオケ行かない？」

「ごめん、今日はパス」

梅子は教室を出ようとしたところで友人から声をかけられて思わず、足を止めずに振り返りながら返事をした。

しかし、それがいけなかった。

よそ見一秒怪我一生、さほどに大したものではないが前も見ずに走るのはいささか間違いが過ぎる。

「おっと」

「つきや」

梅子は前を見ていなかったために、ドアをくぐるのと同時に誰かとぶつかってしまい、思わずしりもちをついた。

どうやらぶつかったのは男子生徒のようで相手の方は梅子のように倒れはしなかったようだがカバンを取り落とし中身が床に散らばっている。

「う、ごめん」

「いや、気にすんな。俺も不注意だった」

梅子は起き上がるよりもまず慌てて散らばった相手の荷物をかき集めた。男子生徒の方も腰をかがめながら教科書などを拾い集めている。

「……これ」

梅子は教科書などに混じつてとある本がその中に含まれていることを発見した。とある本と言っても、性少年が興味を集める如何わしい本などではなく、梅子も持っている本。アースクロニクル・オンラインの公式ガイドブックだ。

数十万人がプレイしているとは知っていても実際に身近に同じゲームをプレイしている人間がいるとは思っていなかった梅子は驚きつつもなんとかそれを押し隠してガイドブックを含めた本を男子生徒に手渡す。

「ほんと、ごめんね」

「だから気にしなくていいって」

「あ」

立ち上がって相手の顔を確認したところで梅子は凍りつく。ある意味でアースクロニクル・オンラインを同級生がプレイしていたのよりも驚いているのは確かだ。

ぶつかった相手はあの御宅翔馬みやくしやうまだったのだ。

どこの学校にでもいるだろう将来の職業は自宅警備員かその予備軍と小ばかにされる多くの場合社交性に欠けた人間。その御宅翔馬であればアースクロニクル・オンラインをやっていたとしても納得だ。

学校ではアースクロニクル・オンラインをやっていることをほとんどの友人に隠している梅子も友人たちに混ざって彼のことを悪く言ったこともある。

まさかそのことを覚えているとは思えないが、梅子にはどうにも複雑だ。

「悪いけど、俺急いでるから」

翔馬はそう言い残すと梅子から受け取った本を乱暴にカバンに押し込め、梅子の言葉も待たずに走って行った。

あとには呆然とした梅子とにやにやと笑みを浮かべながら近づいてくる友人たちが残される。

「いやあ、うめっちも災難だね」

「まさか、おたくにぶつかるとはね」

「っていうか、おたく相変わらずキモいし」

友人たちは翔馬とぶつかった梅子を慰めるようにしているが、その実翔馬とぶつかった梅子のことをからかっていることは梅子にもなんとなくわかった。

小学生でもあるまいにクラスの嫌われ者を菌扱いして、触れた人間を馬鹿にするような感覚なのだろう。付き合いは浅いが彼女たちのこういところが梅子はあまり好きではなかった。

本当に仲のいい人間であれば梅子がぶつかったことをだしにして他人を馬鹿にするようなことはしない。いや、そもそもそれだけ普通の人間であれば、他人のことをこうも悪しざまに言うようなまねはしないだろう。

「あ、ごめん。私急いでるから」

「あっそ。んじゃ、また明日ね」

翔馬とぶつかったことで思わぬ足止めを食ってしまったがアースクロニクル・オンラインが梅子を待っているのだ。

梅子は慌ててぶつかった拍子に落としていたカバンを拾い上げると友人たちへの挨拶もそこに教室を後にした。

「そう言えばおたくのやつ、あいつらが来るとか窓の外見ながら厨二みたいなこと言ってたらしいよ」

「うわ、きつも」

「なんであんなやつと同じクラスになっちゃったんだろ」

「最低だよな」

自分が後にした教室からそんな言葉が聞こえたのを梅子は無視した。

1 (後書き)

誤字脱字の報告、感想などありましたらどうぞよろしくおねがいします。

2 (前書き)

いまさらですが、この作品はPCによる縦読み推奨です

今よりはるか未来の世界に1人の科学者がいた。

彼は天才と呼ばれ、世界と言うものに対する造詣が深く、タイムマシンを発明したり、並行世界が存在することを証明した。

そんな彼は世界征服をたくらむ悪の組織に誘拐され、無理矢理にある装置を作らされた。

並行世界を創造する装置。

悪の組織はその世界を支配し、最終的にはすべての並行世界の支配を目論んでいた。

しかし、科学者は最後の抵抗とばかりに装置を暴走させ、並行世界は現行世界と過去の2つの時代を融合して4つの時代が同時に存在する世界となった。

体力、攻撃力に優れるが機械などの技術を知らず、知能の点で劣る古代人がいる世界。

古代人ほどではないが体力に優れ、さまざまな技能を操る中世人がいる世界。

身体能力は前2世界に劣るが技術力や生産力に優れた並行世界の住人がいる世界。

そして科学者が存在した身体能力的には全世界で最低であるが知識力や技術力ですべての世界を圧倒する未来人のいる世界。

並行世界の住人、相葉健一は突然その事件に巻き込まれ、科学者の娘だった城崎美優に出会う。

そして古代人や中世人の仲間たちとともに悪の組織を打ち滅ぼす。それが家庭用ゲームであるアースクロニクルのストーリーだ。

アースクロニクル・オンラインは、プレイヤーが好きな時代の人物となり、相葉健一たちが悪の組織を打ち滅ぼした後に並行世界で

生活するという設定で行われている。

身体能力が圧倒的に高い前衛タイプの古代人。

スキルや職業補正を受け、前衛から中衛、後衛まで幅広く活躍できる中世人。

医師や技術者として回復職的なポジションの現代人。

科学技術により他のゲームであれば後衛の魔術師のようなポジションに当たる未来人。

4つの時代の人間の中からプレイヤーは1つの時代の人物としてクエストを受ける。

4つの時代が混ざった弊害で各時代の人間同士でいざこざが起きたり、恐竜や悪の組織が並行世界を支配するために開発したモンスターなどが放し飼いの状態にもなっている。

プレイヤーはそれらの問題を解決し、アイテムや報酬を得る。

神崎梅子、ゲーム内での名前をバイカは未来人としてゲームに参加している。

オープン 版のテストの時から参加している古参のプレイヤーであり、能力も装備も現在の最高レベルに近いものが揃っている。

アースクロニクルというゲームには家庭用もオンライン版も上限レベルというものが存在しない。1レベル上がれば一定の能力上昇があり、オンライン版では現在1257レベルまでが確認されている。バイカもレベルが1057と1000を越える廃人の1人である。

装備品も最高クラスの防具にイベントランキング種族別トップ10までしか入手できない限定武器を持ち、シブヤの街を歩く彼女は周囲から多くの視線を集めていた。

いや、視線を集めるというのは梅子の自意識過剰だろう。アースクロニクル・オンラインはVRゲームではない。そもそもVRゲームなど現代の技術力では開発不可能だ。

おそらく彼女をパソコンの画面内に収めた人間は彼女に視線を向けている可能性は高いかもしれないが、それを彼女が自ら知覚する

ことなど不可能であり、単なる妄想でしかない。

そんなものは妄想でありながらも、オンラインゲームを楽しむうえで自分がその世界に存在していると考えるのは間違った楽しみ方ではない。と、梅子は自らを慰める。

梅子は一瞬自虐的な思考に気分が落ちかけるが、オリオンの扉をくぐると一気にテンションが上がり、マウスを握る手にも汗がにじむ。

シブヤの街にあるオリオンと言う店。それは、実際の渋谷の街にあるゲーム会社『オリオン』の場所とまったく同じだ。

アースクロニクルを開発した会社であり、アースクロニクル・オンラインでは限定のストーリークエストを受注するために訪れる店でもある。

梅子はカーソルを受付に合わせるとゆっくりとクリックしてメニューを開く。

開かれたウィンドウには『Clear』の表示が多く浮かんでいる。ただ1つ、たった1つだけその表示がないクエストを受注すると梅子、いやバイカは逸る気持ちを抑えてもう1度自らの装備を確認した。

装備品に間違いはなく、状態も良好。

アースクロニクルでは装備品も含めてアイテムはほとんど消耗品だ。定期的なメンテナンスも欠かせない。せつかく勢い込んで向かう最後のストーリークエストが装備品の整備不良で失敗なんてことになっては目も当てることができないだろう。

回復アイテムも十分な数を持った。準備は万端、抜かりはない。

オリオン内に設置されているゲートを通ってバイカは最後のクエストに出発した。

2 (後書き)

短め

次でプロローグは終了します

「……お、終わった？」

梅子が呆然とそうつぶやいた時には、すでに時計が2時を示していた。

3

クエストに出発したのが16時30分ぐらいだったことを考えれば実に10時間にもおよぶクエストだったわけだ。

何も激戦を物語っているのは時間の経過だけではない。

回復アイテムは底をつき、装備武器は3つが壊れ、防具も5つが破壊された。それらのうちの4つは修復不可能な全壊状態で、捨てるほかにない。

体力ゲージはほんのわずかしか残されておらず、クリアできたことが信じられない。

最後のストーリークエストのボス、ドラゴンは圧倒的な強さでありもともとがチームでの挑戦を前提とされているだけに攻撃力のわりに体力が尋常ではない。

なんとか回避をしつつも、避けきれなかった分のダメージは徐々に蓄積されていく。受けた分は回復し、攻撃を繰り返しているうちに武器は壊れる。

徐々に耐久度を消耗していった防具も途中で壊れ、取り替えている間に攻撃もくらった。

回復アイテムが底をついた時にはさすがの梅子もクリアを諦めかけたものだ。

しかし、なんとかくらくらいつき、ダメージを積み重ねてようやくドラゴンを討伐した。

梅子の目の前にある画面内では光になっていくドラゴンのエフェクトとその前に表示されている会話ウィンドウでつぶられる最後の

ストーリーが進んでいく。

会話内にある、「あなた方」という文字がすでに普通ならば1人で最後のボスを倒すような馬鹿な人間はいないだろうと運営側が考えていることを示していた。

徐々に消えていくドラゴンの姿、粛々と進んでいく最後のストーリー。

梅子はアールクロニクルのファンとしてその言葉の1つ1つをしつかりと記憶に刻んでいく。

『これで、彼らが気づかなかった敵も倒し終えたんだな』

『ああ、健一たちは普通の生活に戻ってるし、まさかこんなことを俺たちだけでやる羽目になるとは思わなかったけどな』

『これもあなた方のおかげです。あなた方が協力してくださらなかったら、このドラゴンを倒すことはできなかったでしょう』

『ほんと、お前らが手伝ってくれて助かったぜ』

『ありがト、かんしゃしてっ』

家庭用のアースクロニクルの登場人物たちが口々に礼を言い、ついにドラゴンがその姿を消す。最後の光の残滓は画面越しに見ていると言うのに、まるで蛍の光のようで幻想的なものだった。

アースクロニクルファンであれば涙をこらえられない感動的なラストシーンを終え、梅子はゆっくりと肺の奥底にたまった空気を吐き出した。

これでひとまずの目標は終了した。これからは適度にイベントに参加しながら他の目標なんかを探ることになるのだろうと、そんなことを考えながらゲートを通ってオリオンへと戻る。

「あれ？」

オリオンのエントランスに到着した梅子は疑問の声を上げた。

突然オリオンが壊滅していたとかの異常事態があったわけではない、ただ、受付のキャラクターの上に『new』というアイコン

が表示されている。

まさかストーリークエストを全制覇した人間には、さらに隠しクエストが用意されているのだろうか。

しかし、そんな話はどこからも聞いた覚えがない。まさか、クリアした人間全員が隠していたなんてことはないだろう。

10時間にも及ぶ激戦の間に新しいクエストが追加されたという可能性もあるが、事前の告知も一切ないということを考えればその可能性は低い。

考えていても埒はあかないので、梅子はとりあえず受付キャラクターを選択してクエスト選択ウィンドウを開く。と、普段であれば即座にクエスト選択ウィンドウが開かれるはずだが、今回に限っては違った。

『おめでとございます。プレイヤー”バイカ”は限定条件を達成しましたので新たな世界が開かれます。新たなクエストを受けますか？』

事務的なメッセージではあるが受付のNPCが今までにこういったメッセージを表示したことはなかっただけに梅子はわずかに戸惑った。

これはもしかしたらフラグなのかもしれない。どちらかと言えばインドア系の趣味が多い梅子は通学途中などにはゲームに漫画、小説のいずれかを暇つぶしに使用している。

そんな中で物語上で語られる異世界に召喚されたりする作品の多くは、こういった普段はありえない変化が起こり、こういった選択で何も考えずに『はい』を選択することが原因だろう。

いや、梅子自身あれが物語であり現実ではそんなことはありえないということとは理解していながらも、心のどこかでは期待をしている。

最後のクエストを受けた時と同じく、手のひらには汗がにじみ、

緊張から呼吸が止まる。

かちりとマウスを押し込んだが、何も起こらない。パソコンの中に引きずり込まれることも、突然意識が遠のくなんてこともない。

画面内では、クエスト受注には時間制限があります、予約しておきますか？ と受付のキャラクターから説明がなされている。

これでようやく合点がいった。梅子の期待に反してこれは、イベントクエストのようなものだろう。

クリアした人間たち何人かでクエストを受けて達成をする。そしてイベントクリアでなにか特典がもらえるオマケのクエスト。

ならば、明日にでもやればいい。

梅子は予約を入れると、クエスト開始時間を確認してログアウトした。

ゲームは好きだが花の女子高生。いちおう美容にも多少の気を遣わなくてはならない。

と言うわけで睡眠不足はお肌の天敵という言葉どこかで聞いたことのある梅子は、ベッドに倒れこんだ。

「あ、お風呂入んなきゃ」

一度は倒れこんだがのそりと起き上がって風呂へと向かう。

明日もまた学校があるのであまり長く入っているわけにもいかないだろう。

イベントクエストの時間は19時からだったので、とりあえず18時にもゲームにログインして装備を整えよう。それまでなら今日は一緒に遊べなかつた友人たちに付き合う時間も取れるはず。

湯船につかりながら明日の予定を適当に考えていると、最近の寝不足がたたって眠気が襲い掛かってくる。

このまま眠ってしまったらいろいろと大変なことになってしまいそうなので、なんとかこらえて風呂を出る。

髪を乾かしてからベッドにもぐりこむと案の定すぐに眠気がやってきたので、今度は抗うことなく睡魔に身を任せる。

安心して眠れるのはこれが最後などと言つことをこのときの梅子は知る由もなかった。

相も変わらず授業中は退屈で仕方がなかった。襲ってくる眠気をなんとか撃退しつつ、黒板に書かれた内容を機械的にノートへ書き写していく。

クエストの時間が決まっている以上、今日はそれほど焦っているわけではないが、クエストの時間が来るのが待ち遠しくないわけではない。

むしろ、最後のクエストをクリアした後のクエストである以上、どのような特典が手に入るのか期待で胸が膨らむというものだ。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、教師が終了を宣言したところで入れ替わりに担任教師が供託に立つ。

最近通り魔事件が起きたので注意するようにと注意を喚起しているが、そんな話をまじめに聞いている人間はごく少数だ。

当然のことながらまともに聞いていない人間の1人である梅子は、家に帰ったとに待ち受けているアースクロニクル・オンラインのクエストがどんなものであるかという思考にふけっている。

時刻はそろそろ16時になるうかという時間で、昨日壊れた装備を直す時間を考えても2時間は余裕がある。

今日もまた友人たちはカラオケにでも行くのだろうから、時間まではそれに付き合えば問題はないはずだ。

放課後の大半はカラオケに行こうと声をかける友人に目を向けてみれば、そそくさと帰り支度をして席を立とうとしているところだった。

いつの間にか担任の話なども終わっていたので、それが問題のある行為というわけではないが、いささかいつもと雰囲気が違う。

「あれ？ 真紀、どうしたの？ 今日カラオケ行かないの？ 今

日は私もちよつとは一緒できるんだけど」

「え！？ あ、ごめん。今日はちよつとダメなの」

「……そう」

どうにも様子がおかしい。いつもはもつと軽い調子でなんでも口にしてる彼女が、今日はなんだか何かに追われているかのようなおびえようだ。

声をかけた梅子に怯えているわけではないようだが、声をかけられたことに戸惑っているのは間違いない。

いつもの彼女であれば、担任教師が言っていた通り魔云々について担任の文句を言いながら何か言いそうなものだが、それも無い。

「じゃ、私急ぐから」

そう言つて教室を出ようとする友人が恐怖を湛えながら1人の人物に目を向けたことに梅子はなんとなく気がついた。

すでに教室を出て行つた彼女の視線が通つただろう位置をたどつてみれば、その先にいるのは1人の男子生徒。窓際でのんびりと帰り支度を整えている御宅翔馬の姿がそこにはあった。

彼女がなぜ翔馬を怖がつていたのか梅子にはまったく見当もつかないがなにかあつただろうことは間違いない。

彼女は常々翔馬のことを馬鹿にしていたし、その視線には侮蔑や嘲りの感情以外にはなかった。少なくとも彼女が翔馬に恐怖を抱く理由がない。

詳しい理由など皆目知らないが、もしかしたら脅されているのかもしれない。そんな可能性があるのであれば、そこまで仲がいいわけでないとは言え友人なのだから助けられない理由はない。

彼女はすでに教室を出てしまっているし、翔馬に探りを入れてみるのも間違ではないだろう。

「あの……御宅君、ちよつといい？」

ちよつどカバンを手に取つて教室を出ようとしている翔馬を梅子は呼び止める。

教室にはほとんど誰も残っていないが、わずかに残っていた人間

はクラスでも腫物扱いされている翔馬に、比較的クラスを中心に近い梅子が声をかけたと言うことに驚きを隠せない様子だった。

「どうしたんだ、神崎さん」

「ちよつと、話があるんだけどついてきてもらえる？」

「……もしかして愛の告白とか？」

「そんなんじゃないわ」

軽くおどけて見せる翔馬のセリフに梅子も軽い調子で答える。

今までまともに会話したことはなかったが、翔馬は案外普通だ。

もう少し生理的に嫌悪感を抱かせる人物像を想像していただけに意外なことこの上ない。

困惑した様子のクラスメイト達をしり目に教室を後にすると、人目につかない場所を探して歩き始める。

一応、友人の秘密と言った周りに聞かれてはまずい話になった場合、人気の多い場所で話すわけにはいかないだろうと考えてのことだったのだが、なかなか条件にあった場所が見つからない。

こういう時に屋上でも解放されていれば楽なのかもしれないが、生憎とこの学校の屋上は立ち入りが禁止されている。校舎裏なども運動部がたむろしていることが多いため、学校内には目当ての場所はないかもしれない。

「学校の外でも大丈夫？」

「ん？ ああ。今日はもう帰るだけだから」

意外と普通の人物であった翔馬に、なぜ友人があそこまでおびえた様子だったのか梅子には見当もつかなかった。

威圧的なわけでもなく、何も知らない一般人がイメージするオタクやマニアの類のようにコミュニケーション力に欠陥も見受けられない。こちらの質問に挙動不審になることもなく、いたって普通に受け答えをしている。

この時点で梅子の中で御宅翔馬という人物に大きな修正がくわえられていた。

少なくとも今まで友人たちが陰でささやいていた陰気で生理的嫌

悪感を抱かせる人物というのは間違はなく間違いだ。

日本語的になんだか間違っているような気がするが、それだけ周囲の言葉に惑わされて自分の中で出来ていた御宅翔馬の人物像が間違っていたのだろうと梅子は無理矢理自分を納得させた。

「御宅君の家ってどっち？ 駅の方だったらちよつとよさそうな公園があるんだけど」

「ああ、あの森林公園？ 駅に近い割にあそこって広いよな」

「知ってるってことは、あっちの方で問題ないの？」

「ん。まあ、大丈夫だ。今日は急ぐ用事もないから」

家の方向について触れようとしていない翔馬の物言いに少しばかりの違和感を感じつつ、梅子は半歩後ろを歩く翔馬を伴って学校を出た。広だけあって人気のない場所などいくらでもあるが、そこにいて自分が襲われたりはしないだろうかとそんなことが一瞬頭をよぎる。

しかしながら、自分の後ろを歩く彼がそんな真似をする悪人には到底思えず、一瞬でも今までの風評でイメージしていた御宅翔馬と本物を重ねてしまったことを、梅子は心の中で謝るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1995ba/>

アースクロニクル・オフライン

2012年1月6日09時46分発行